

# 漢詩の世界



しゅんげう  
春暁  
しゅんぎやう

まうかうねん  
孟浩然  
もうこう

しゅんみんあかつき  
春眠暁を覚えず  
しゅん

しよしよていてう  
処処啼鳥を聞く  
しよしよ  
ちよウ

やらい  
夜来風雨の声

花落つること知りぬ多少ぞ

花	夜	処	春
落	来	処	眠
知	風	聞	不
多	雨	啼	覚
少	声	鳥	暁



- 漢詩の表現やリズムを捉え、読み味わう。
- 漢詩に描かれた情景を捉え、古人の心情を想像する。

- 1 【春暁】 春の夜明け方。
- 2 【処処】 あちらこちら。
- 3 【啼鳥】 さえずる鳥の声。
- 4 【夜来】 昨夜以来。
- 5 【花落つること知りぬ多少ぞ】 さぞ花がたくさん散ったことだろう。

◆ 孟浩然 [689-740] 中国の唐時代の詩人。清新な作風で自然を詠んだ歌が多い。四十歳で郷里から唐の都長安に上り、李白・王維らと親交を結んだ。〈詩の原文は『漢詩選7 唐詩選下』による。〉

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白

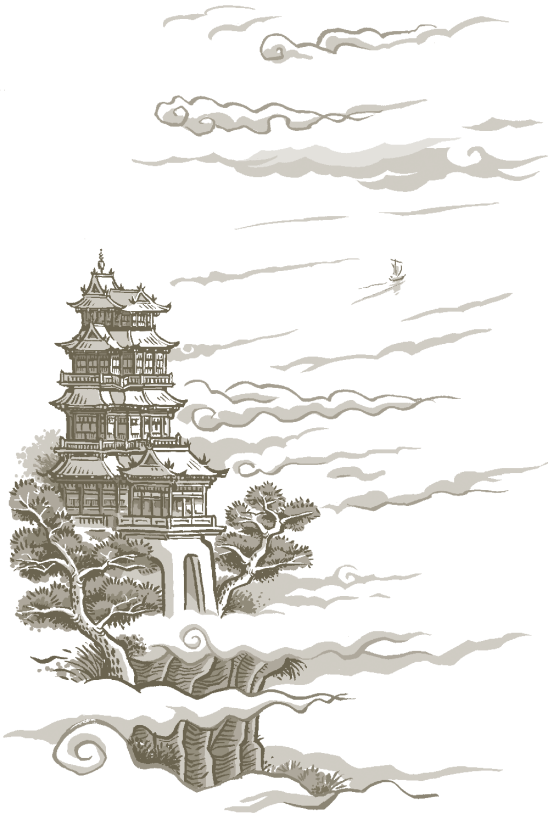
故人西のかた黄鶴楼を辞し

烟花三月揚州に下る

孤帆の遠影碧空に尽き

唯だ見る長江の天際に流るるを

故人西ノカタ辞シ黄鶴楼ヲ  
 烟花三月下ル揚州ニ  
 孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ  
 唯ダ見る長江ノ天際ニ流ルルヲ



1【黄鶴楼】現在の中国武漢市の南西、長江に面して建てていた高樓。仙人が、絵にかいた黄色い鶴に乗って飛んでいってしまったという伝説がある。

1【広陵】揚州の別名。現在の江蘇省揚州市。

2【故人】ここでは旧友のこと。孟浩然を指す。

3【烟花】花に立ちこめる霞のこと。

4【碧空】青い空。

5【天際】天の果て。空のはるかかなた。

◆李白 [701-762] 中国の唐時代の詩人。自由奔放な詩風で知られ、杜甫とともに二大詩人とされる。また、その作風から「詩仙」とも称された。  
 〈詩の原文は『新書漢文大系 6 唐詩選』によろしく。〉

# 春望

杜甫<sup>とほ</sup>

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり

家書万金に抵る

白頭搔けば更に短く

渾べて簪に勝へざらんと欲す

国<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>て山<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>在<sup>リ</sup>  
城<sup>ニ</sup>春<sup>ニ</sup>して草<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>深<sup>シ</sup>  
時<sup>ニ</sup>に感<sup>ジ</sup>じては花<sup>ニ</sup>にも涙<sup>ニ</sup>を濺<sup>ギ</sup>  
別<sup>レ</sup>れを恨<sup>ン</sup>では鳥<sup>ニ</sup>にも心<sup>ヲ</sup>を驚<sup>カ</sup>かす  
烽<sup>ニ</sup>火<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>に連<sup>ナ</sup>り  
家<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>に抵<sup>ル</sup>  
白<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>搔<sup>ケ</sup>けば更<sup>ニ</sup>に短<sup>ク</sup>  
渾<sup>ベ</sup>て簪<sup>ニ</sup>に勝<sup>ヘ</sup>ざらんと欲<sup>ス</sup>

1【春望】春の眺め。

2【国破れて】国の都が破壊されて。

3【城】城壁で囲まれた都市。「国」「城」はともに当時の都、長安（現在の陝西省西安市）を指す。

4【時に感じては】時世のありさまに悲しみを感じては。

6【烽火三月に連なり】戦乱が三か月間続いて。「烽火」は戦闘で用いるのろしの火。

7【家書】家族からの手紙。

8【白頭搔けば更に短く】頭の白髪はかくたびに抜け落ちて薄くなり。

9【渾べて簪に勝へざらんと欲す】全く簪をさすこともできないほどだ。「簪」はここでは冠を留めるピンのこと。

◆杜甫 [712-770] 中国の唐代の詩人。厳格で規律正しい作風で、時代を反映した叙事詩に優れていた。李白の「詩仙」に対し、「詩聖」と称された。  
〈詩の原文は『漢詩選9 杜甫』による。〉

# 学びの道しるべ



## 目標

- 漢詩の表現やリズムを捉え、読み味わう。
- 漢詩に描かれた情景を捉え、古人の心情を想像する。

## 内容を整理する

- 1 語句の意味や構成などに注意して音読し、内容を捉えよう。

## 読みを深める

- 2 三編の漢詩について、それぞれ次の観点から読みを深めよう。
  - ① 作者はどこにいて、何を見聞きしたか。
  - ② そのときの作者はどのような心情か。

## 自分の考えを深める

- 3 三編の漢詩の中から、自然を表す表現を抜き出そう。それらは、描かれた情景の中でどのような効果をあげているだろうか。考えたことを文章に書き、交流しよう。

## 学びを振り返る

目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめよう。

振り返りのキーワード 漢文のリズム・情景・心情

## 学びを広げる

好きな漢詩を選び、現代語の詩に作り替えよう。

「この教材での学びをこれからの学習や読書へつなげよう。」

## 私の本棚



漢詩入門  
いっぴのともし  
一海 知義



漢詩への招待  
いしかわ ちひさ  
石川 忠久

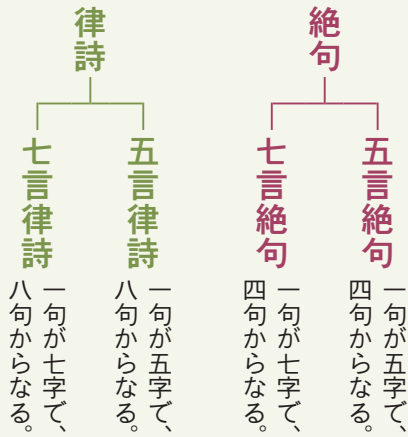


気ままに漢詩キブン  
あだち さちよ  
「著」足立 幸代  
「監修」三上 英司

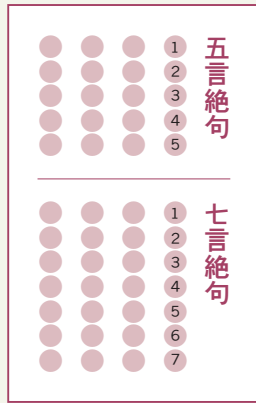
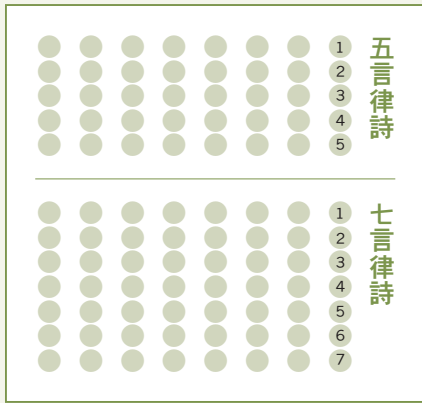
漢文の読み方

# 漢詩の形式

漢詩には、四句からなる絶句と、八句からなる律詩とがあり、それぞれに五言と七言があります。



●絶句の四つの句をそれぞれ、起句・承句・転句・結句といい、ここから、文章の構成法を表す「起承転結」という言葉ができました。



## 返り点

漢文を訓読するときには、下の漢字から上の漢字へと返って読む場合があります。このとき、読む順序を示すために漢字の左下につける記号を「返り点」といいます。

①レ点  ..... 一字だけ上の字に返る。

我 読 書。  
我書を読む。

不 知 道。  
道を知らず。

②一・二点  ..... 二字以上離れた上の字に返る。

青 雲 在 目 前。  
青雲目前に在り。

黄 鶴 楼 送 孟 浩 然 之 广 陵。  
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る。

押韻と対句

漢詩には、決められた句の末尾に同じ響き（韻）をもった文字を置く「押韻」のきまりがあります。「韻を押す」「韻を踏む」という言い方をします。

また、構造が似ている二つの句を対にして並べる「対句」という表現方法も多用されます。

絶句

杜甫

江 碧 鳥 逾 白

山 青 花 欲 然

今 春 看 又 過

何 日 是 帰 年

江碧にして鳥逾白く

山青くして花然（燃）えんと欲す

今春看又過ぐ

何れの日か是れ帰年ならん

対句

文法的にも意味的にも対応した二つの語句を並べ、言いたい事柄を際立たせたり、印象づけたります。

押韻

偶数句の末尾に同じ響き（韻）をもつ文字を置き、美しいリズムを作り出します。七言詩の場合、第一句も押韻します。

※「春曉」は五言絶句ですが、

第一句も押韻しています。



上の漢詩の舞台となった錦江の現在の様子